

スローフード推進運動の三段階

Three Stage Development of “Slow Food” Movement

杉山 道雄

Michio SUGIYAMA

Abstract

Purpose of this study is to clarify the present feature of farmer’s market (Asaichi) and to analyze the three stages of development of “Slow food” movement. The main findings showing the three stages development of activities were;

1. The farmers market called Asaichi should be opened every day and business hours should be longer.
2. It is important that local and traditional farm products should be sold at the market.
3. In order to communicate between farmers and consumers as for the local farm products. The food cooking demonstration places should be built and this will help the communication between producers and consumers.
4. The related business such as China in Tajimi city, wood in Takayama city, knife & folks in Seki city should be coordinated for further development of local food consuming culture in this area.

Keywords: 地産地消、スローフード、朝市、スローライフ都市連盟

1. はじめに 目的と方法

毎日のように「食」に関するニュースが報じられている。地産地消やスローフードが注目されているのは以下に述べるような理由があると思われる。バブル崩壊後のライフスタイルの変化や外食やコンビニ食、加工食品への傾斜、また、ファストフードの蔓延による食のグローバル化への危機もあろう。毎年低下する食料自給率への不安、食生活の中でインスタント食品や外食が多いことへの健康不安、さらには、BSE や鳥インフルエンザによる食の安全性への疑問も挙げられる。その一方で、今までの農業に対し、環境に優しい農業の萌芽への評価も考えられる。

本研究の具体的な目的は第一に朝市の現状と展開方向の三形態を検討し、長く典型的に展開している岐阜県高山市の朝市の成立要因を検討すること、第二にスローフード運動の展開として具体的な 3 つの段階を提示する事を目的とする。なお、岐阜県に於ける食をめぐる食品安全推進条例や食品安全推進協議会、そして今回の地産地消・地産外消の県産品販売促進大作戦にあたり、いくつかの提案をしたい。

2. 朝市の現状と展開方向

現在、産直市場数は全国で総計すると 13,000 箇所、約 1 兆円の市場を形成している。

岐阜県朝市連合会に登録している朝市数は 234 である(農協による朝市は 52 箇所)、設置市町村数は 87 箇所(2003 年で市町村合併により変化している)で全市町村の 88% に達している。

そのうち、約 90% にあたる 211 の朝市では駐車場が設備されている。

岐阜県の朝市は、月間 1~2 回開催が 36%、3 回が 26% と回数が少ない事が特徴である。その点ではほぼ毎日開催の高山市の朝市が評価されるのである。併せて、開催時間が短い事も特徴である。4 時間以下の開催が 42%、他は 5 時間以上開催している。この点でも、高山市の朝市の恒常的な開催が注目される。

荒井氏¹⁾は朝市の展開形態を次の三形態にまとめている。

第一形態：無人のロードサイドマーケットで果樹園や野菜畑の面する道路に無人の農産物販売置き場を設け、収穫した柿や野菜などの農産物を即座に束ね、並べておくものである。代金はコインであるため、コインマーケットとも呼ばれる。消費者との対話もないし、代金の安全管理が心配であるが結構な市場となっている。

第二形態：消費者に直接販売する段階である。とりわけ、多いものが交流・地域振興を目的とした J A や市町村の常設特売場である。設備はよいが開催日数が少なく、開催時間も短い。岐阜県黒野にあるフレッシュ・マーケットで「おばあちゃん市」と呼ばれるものもこれにあたる。農家と消費者との対話があるのが特徴で、月間 10~50 万円の収入があるという。

第三形態：道の駅のように道路沿いに常設の市場を設け、駐車場、トイレ、喫茶場所を提供した朝市である。現状ではこの形態が最も成功しているといえよう。

第三形態においては、特に郷土の名物料理を用意する事が大

切である。学校給食が子供に対して郷土料理を教えるとすれば、朝市や地域のレストランは地域や地域外から来訪する訪問者に対して郷土料理を紹介する事となる。ここで朝市として長く続いている高山市の事例を検討してみよう。

3. 朝市の評価

農業サイドでの産地直売や朝市、直売所は地域に於ける生産活動を大きく促進させている。しかし、今までの朝市や直売所に対する評価は低く、生産農家における片手間での産物、大量流通や大規模農家の助けとなっていないというものである。生業としては確立せず、システムとしても確立していないとして否定する意見である。

しかし、私は次のように考えている。長年続いている高山の朝市を調べてみると確かに小規模農家、老人、女性農家を巻き込んでおり、大規模専業農家も含まれている。大規模農家は朝市に出店しているので、観光客は気にいった農産物を見つけ、帰宅後もさらに注文している。そのため、農産物の販売先は観光客を通じて地域以外、全国的に広がりを見せている。つまり、アンテナショップの役割を果たしているのである。

ここで高山の朝市の特徴についてみてみよう。

高山市朝市の特徴

1. 長期間継続していること
2. 老人女性従事の小生産者が多い。
3. 大規模専業農家も参加し、消費者に品質の良さを示し、旅行者が帰宅後、あとから注文する場合が多い。この意味でアンテナショップの役割を果たしている。
4. 毎日一定時間開催している。
5. 高山市の特産物を商品化し、市以外に全国的に売り出している。
6. 農産物の加工・調理方法、召し上がり方まで対面販売で生産者と消費者とのコミュニケーションの場となっている。
7. 農産物ばかりでなく高山を中心とした生活様式をつたえる品々を売り出している。

このように朝市を積極的に評価し、「地産地消」運動の展開すべき方向として参考となるだろう。

4. 地産地消運動の三段階

朝市を含めて地産地消運動展開の三段階として整理してみよう。

第一に生販が連携したフードシステム（生産から食卓までの食のシステム化した経路）の確立が第一段階として必要。生産者が朝市などの販売組織を作る場合に大規模農家の点的存在ば

かりでなく、小規模農家もふくめた面的存在を持たせるべきである。さらに休日(日曜日)開催ばかりでなく、毎日開催が望ましい。それには集客数が問題となるのでまず各地域に存在する朝市や道の駅など既存施設に敷設する形が良いだろう。

第二に農家の伝統食を掘り起こし、商品化して一般的商品としたことである。朴葉味噌は一般家庭の日常食であったが外部観光客に評価され、堂々とした地域の商品となり欠かせない飛騨のおみやげとなったことである。このことは「農産物売る場合、販売すれば終わり」でなく、調理（方法）や加工までの情報を伝え、地域の食文化として売りだすことである。品物の価値を高めることは過剰包装としてでなく、どうおいしく戴けるかのメニューを提案し、消費者に伝えることである。朝市が評価されるのは消費者が生産者と話し、生産の様式や過程ばかりでなく、調理や食べ方などを聞くことや教わるコミュニケーションがあるからである。多くの朝市は販売までに終始しているが調理デモンストレーション広場を設け、おいしく、楽しくいただけることで運動の第二段階に入ると言てよい。

第三段階は食を中心として地域産業の連携である。

岐阜県にはすぐれた農産物がある。一六品目の野菜、葉草、畜産物、山菜それに川産物などである。これらは素材段階のものが多く、それらを調理・加工していくつも名産品が作られている。ここで提案したいことは東濃地方を中心とした陶器産業や関市などの刃物産業、美濃市などの和紙産業、また各地の木材産業などと連携し、岐阜地域の生活様式を伝える食卓文化を築き上げることである。

岐阜は水がおいしい。地酒もおいしい。これらを取りいれて岐阜の食卓文化として各地でイベントを行うのもよいであろう。

第一段階は地域食のフードシステムの確立（朝市の再評価と地域農産物を道の駅などに販売し、それを拡大し、定期化すること）第二段階は「おいしい食を提供」することとすれば第三段階は食文化の確立段階で「豊かな食卓文化を提供」ことになる。これは楽しく愉快的な食文化をイベントを通じて拡大する段階といえるだろう。

スローフードが地域の食文化形成運動であるとすれば県内都市の連携と地域内の産業連携が必要であろう。

そこで県内での具体的な地域産物やそれをとりあげる理由を岐阜地域と飛騨地域にわけて検討してみよう。県内で生産され、全国シェアの高いものとして岐阜県が指定しているものを岐阜地域についてとりあげてみよう。

岐阜地域には木曾、長良、揖斐の三川があり、沖積土壌に合った農産物が多い。県内農産物一六品目が選ばれている。あきしまささげ、あじめこしょう、きくいも、菊ゴボウ、桑の木豆、沢アザミ、一六ささげ、千石豆、徳田ねぎ、西方いも、まくわり、守口大根、わしみかぶ、蜂屋柿である。

さらに品目として岐阜地域に相応しいストーリー性がある

スローフード推進運動の三段階

もの、すなわち、当該農産物の歴史、伝統や風土との調和性などがあるものとして位置づけることが重要である。

例えば蜂蜜生産の全国シェアが高いことはあまり知られていない。日本の蜂蜜生産（養蜂業）は外国にない「転地養蜂」が特色とされる。転地養蜂とは日本列島が南北に長いことから鹿児島から北海道まで開花シーズンを追って移動して採蜜することである。養蜂業者がどこに住んでいてもよいが、日本の真ん中である岐阜地域に集まっており、著名な養蜂家がいた。現在は中国に生産拠点を移したため、輸入が増えたとはいえ、日本に於ける有力な供給地となっている。

飛騨地域についてみれば飛騨野菜、特にトマトやほーれんそうなど夏野菜は夏期に関西市場への主要な供給地である。西日本には海拔1000メートル以上の野菜産地はすくなく、岡山県の蒜山ぐらいである。

このほか、寒天、奥美濃古地鶏、鮎、烏骨鶏、麩生産、川魚等があげられる。

以上のような岐阜県内の農産物について単に販売するという段階から、調理デモンストレーションひろばを設置し、生産者と消費者とのコミュニケーションの拡大、さらに食卓文化として成立させる事である。」このことは岐阜県内のスローライフ都市宣言を発表している近隣の諸都市との提携・連携が必要であろう。

5. むすび

本稿は食に対する地産地消やスローフード推進運動に対して近年県内各地に存在する朝市を検討する中で継続的に運営されている高山市の朝市の再評価を行った。さらに生産者と消費者とのコミュニケーションの確立、調理デモンストレーションひろばの併設、さらに陶器産業、刃物産業、和紙産業と連携して食に関する食卓文化を確立することである。それを目指して近隣市町村の産業が連携し、スローフード都市が連携、連帯する事の重要性を述べたものである。

このことにより、地域の食文化、食卓文化を成立させる事が大切であろう。このスローフード確立運動が基軸となって地域産物を食文化、さらに生活様式としての食卓文化として成立させ、それを教育し内外に宣伝することも課題である。その意味で「地産地消・地産外消」はひとつの方向性をもって、その意味づけを考察したものである。

参考文献

- 1) 三島徳三 地産地消が豊かで健康的な食生活をつくる
筑波書房 2004
- 2) 荒井 聡 地域食糧確立運動の展開と自給率向上の課題 東海地区にみる一
『農業・農協問題研究』30号 2004、2月

号

3) 浅井昭三 日本の農産物直売所 その現状と将来 筑波書房 2004、1-71

(提出期日 平成16年11月26日)